

奥園勝昭

(有)奥園建設
揮毫 奥園 勝昭氏



(有)奥園建設
大牟田市大字唐船247
☎0944-54-2244

「木は何十年、何百年をかけて大きくなります。そして伐採され命を絶たれたその木に、もう一度息を吹き込むのが私の家づくり」。

マンションや洋風・プレハブ住宅が住まいの多くを占める中で「日本の風土と文化に最も適した木造住宅」にこだわってきた奥園勝昭さん(66)。手がけた家は、その技術と精神がキラリと輝くようだ。

勝ちゃん、ひとの倍方マダセ

昭和15年、9人兄弟の長男に生



まれた奥園さん。中学を卒業して大牟田市内の建設会社に就職。昼間は木工の仕事で汗を流した後、夜間高校に通った。当時は日給八十円、1カ月働いても二千円余り。これから五百円の学費を出し、大工道具を買おうと、残らなかった。「今日は弁当はなかけんね」と母親に言われて仕事に出る日もあったほどの家計状況でした。それでも道具は全部自分で揃えるわけですよ。例えば鋸は千三百五十円；どんなに働いても家に入れるお金はなかったですね」

責任感が強くて頑張り屋、仕事の覚えも早かった奥園さんに、親方が2年目からの学費を出してくれるほど気に入られた。ここで4年、そして東京に出て一年働いたあと、20歳で大牟田に戻って再び大工の仕事。しかし仕事ぶりが違った。他の大工が昼休みしている間も黙々と道具の手入れ。「勝ちゃん、8時から5時まで人は人といっちゃもん変わらん。5時から、人の倍方マダセ」少年の頃に聞いたそんな言葉が、心の真ん中に生きていたからだった。25歳で独立、同時に恵美子さんと結婚。29歳で土地を購入、これが現在の自宅兼事務所・作業場。しかしこの土地取得は容易ではなかった。当時口座を持っていた大手銀行に融資を申請。ところが「5倍貸付制度があつて二十万円の預金をしていましたから、百万円を借り入れようとしたのです。ところが次から次に、あれやこれやの書類提出を求められ一向に貸してくれなかった」とうとうと奥園さんはキレた。大声で啖呵を切り、個人の預金全額と客からの前金など計百数十万円をその場で下ろし、この現金を持ってたまま駆け込んだのが「しんきん」だった。

皆さんの応援のおかげ

この金策には2カ月駆け回った。「請け負った金額に対して自信を持った仕事」これが奥園さんの姿勢。だからつい値段以上の仕事になることも。ある年など一億五千万円の受注がありながら利益は二百五十万円。税務署が調査に入って「もうちょっと儲かって下さい」と言っただけ帰ったほど。そんな「無茶」ができたのは、ソロバン塾をしていた恵美子さんの支えだった。「赤字は私が埋めるから心配せんでよか、と言ってくれた。今があるのは、皆さんが応援してくれたお陰です」

平成5年に法人化して(有)奥園建設に。そして昨年、二男梯さんに社長を譲って会長となった。

木を見せる家づくり続ける

市場経済の原理は競争。しかし家づくりに浸透するコスト競争は、価値と文化を破壊し、技能者を育てない。これが奥園さんの無念だという。実際、安価な木材はデイスカウト店に行けば並んでいる。「柱にはそれぞれ表情がある。大工は、その木の個性にあつた場所に使うのです。私は、木を見せる家づくりを続けたい」

奥園さんに、職人の魂を見た。

